

# 日本語指示詞の直示用法の獲得（2）：

一女児2歳0ヶ月から2歳5ヶ月までの予備的研究\*

大野 清 幸

The Acquisition of the Deictic Use of Japanese Demonstratives (2):

A Preliminary Study of a Japanese Girl Y (2;0)-(2;5)

Seiko Ono

## 第1章 序

一女児（以下、Y児と呼ぶ）における日本語指示詞の直示用法に関する包括的な研究を実施する前段階として、大野（2005）は、Y児1歳6ヶ月から1歳11ヶ月における日本語指示詞の直示用法に関する予備的研究を行った。<sup>1</sup> 大野（2005）の続編として、本稿は、Y児2歳0ヶ月から2歳5ヶ月における日本語指示詞の直示用法に関する予備的研究を行う。

本稿で使用した発話資料は、以下の通りである。1994年12月に日本国愛知県名古屋市中区で誕生し、成長した日本人の一女児の話し言葉を両親などの協力の下に、デジタルビデオ（ミニDVカセット）テープに記録したものを転記したものである。観察対象児は長女であった。観察期間を通じて、1990年6月生まれの兄がいた。父親の学歴は大学院修士課程修了。母親の学歴は四年制大学卒業。転記の際の書式は、Oshima-Takane et al. (1998) を採用した。元データは1ヶ月に4回、各回、一時間をめどにデジタルビデオ（ミニDVカセット）カメラを用いて、筆者が撮影・録音した。本稿において、分析対象とする発話資料は、(2;0) から (2;5) までのものである。発話資料収集時の主な参加者は、以下の通り。CHI= Target child、MOT = Mother、FAT = Father、BRO = Elder brother。

第2章で、一女児2才0ヶ月から2才5ヶ月における日本語指示詞の直示用法について考察する。第3章では、Y児およびY児に対する入力における興味深い日本語指示詞を含む発話を観察する。第4章で、結論を述べる。

## 第2章 一女児2歳0ヶ月から2歳5ヶ月における日本語指示詞の直示用法

大野（2005:10 表8）は、Y児（1;6）-（1;11）における指示詞各形の月齢別出現回数を示し、大野（2005:11 表9）は、Y児（1;6）-（1;11）に対する入力における指示詞各形の月齢別出現回数を示した。それぞれ、表1、表2として再掲する。

表3は、Y児（2;0）-（2;5）における指示詞各形の月齢別出現回数を示す。表4は、Y児（2;0）-（2;5）に対する入力における指示詞各形の月齢別出現回数を示している。

表1 Y児(1;6)-(1;11)における指示詞各形の月齢別出現回数(=大野(2005:10表8))

指示詞/月齢	1;6	1;7	1;8	1;9	1;10	1;11	計	割合
これ	47	6	52	42	53	118	318	0.706666667
ここ	0	4	19	24	17	13	77	0.171111111
こっち	3	2	12	2	13	3	35	0.077777778
こちら	0	0	0	0	0	0	0	0
この	0	0	1	2	0	0	3	0.006666667
こんな	0	0	0	0	0	1	1	0.002222222
こう	0	0	0	2	13	1	16	0.035555556
あれ	5	74	106	30	19	169	403	0.788649706
あそこ	0	0	2	0	0	0	2	0.003913894
あっち	10	29	11	10	11	32	103	0.201565558
あちら	0	0	0	0	0	0	0	0
あの	0	0	0	0	1	0	1	0.001956947
あんな	0	0	0	1	0	1	2	0.003913894
ああ	0	0	0	0	0	0	0	0
それ	0	0	0	2	0	0	2	0.25
そこ	0	0	0	1	0	1	2	0.25
そっち	0	0	2	1	0	0	3	0.375
そちら	0	0	0	0	0	0	0	0
その	0	0	0	0	1	0	1	0.125
そんな	0	0	0	0	0	0	0	0
そう	0	0	0	0	0	0	0	0
コ系指示詞の計	50	12	84	72	96	136	450	0.464396285
ア系指示詞の計	15	103	119	41	31	202	511	0.527347781
ソ系指示詞の計	0	0	2	4	1	1	8	0.008255934
全指示詞の合計	65	115	205	117	128	339	969	

表2 Y児(1;6)-(1;11)に対する入力における指示詞各形の月齢別出現回数(=大野(2005:11表9))

指示詞/月齢	1;6	1;7	1;8	1;9	1;10	1;11	計	割合
これ	123	157	249	241	182	216	1168	0.581963129
ここ	25	43	46	47	41	27	229	0.114100648
こっち	42	59	35	24	17	28	205	0.102142501
こちら	0	0	0	0	0	0	0	0
この	8	23	49	32	13	20	145	0.072247135
こんな	5	7	17	15	11	15	70	0.034877927
こう	25	34	36	44	19	32	190	0.09466866
あれ	4	39	37	24	18	34	156	0.426229508
あそこ	2	4	8	5	0	3	22	0.06010929
あっち	33	42	22	11	18	34	160	0.43715847
あちら	0	0	0	0	0	0	0	0
あの	2	8	3	5	2	3	23	0.06284153
あんな	0	0	0	1	2	2	5	0.013661202
ああ	0	0	0	0	0	0	0	0
それ	43	46	58	49	56	64	316	0.5
そこ	14	19	8	12	14	8	75	0.118670886
そっち	6	4	8	9	1	4	32	0.050632911
そちら	0	0	0	0	0	0	0	0
その	6	9	9	21	11	5	61	0.096518987
そんな	11	19	15	15	20	12	92	0.14556962
そう	12	11	6	8	17	2	56	0.088607595
コ系指示詞の計	228	323	432	403	283	338	2007	0.667886855
ア系指示詞の計	41	93	70	46	40	76	366	0.121797005
ソ系指示詞の計	92	108	104	114	119	95	632	0.21031614
全指示詞の合計	361	524	606	563	442	509	3005	

表3 Y児(2;0)-(2;5)における指示詞各形の月齢別出現回数

指示詞/月齢	2;0	2;1	2;2	2;3	2;4	2;5	計	割合
これ	188	260	252	376	167	234	1477	0.731912785
ここ	33	11	1	6	10	4	65	0.032210109
こっち	6	52	59	54	70	44	285	0.14122894
こちら	0	0	1	0	0	0	1	0.00049554
この	1	1	5	19	17	5	48	0.023785927
こんな	1	0	1	0	4	0	6	0.002973241
こう	0	2	38	49	8	39	136	0.067393459
あれ	50	3	0	2	1	7	63	0.456521739
あそこ	0	0	0	0	0	0	0	0
あっち	15	15	11	10	5	12	68	0.492753623
あちら	0	0	0	0	0	0	0	0
あの	3	0	0	2	1	1	7	0.050724638
あんな	0	0	0	0	0	0	0	0
ああ	0	0	0	0	0	0	0	0
それ	0	1	0	1	1	2	5	0.384615385
そこ	0	0	0	2	0	0	2	0.153846154
そっち	0	0	1	0	0	0	1	0.076923077
そちら	0	0	0	0	0	0	0	0
その	0	1	0	1	1	0	3	0.230769231
そんな	0	0	0	1	0	1	2	0.153846154
そう	0	0	0	0	0	0	0	0
コ系指示詞の計	229	326	357	504	276	326	2018	0.930382665
ア系指示詞の計	68	18	11	14	7	20	138	0.06362379
ソ系指示詞の計	0	2	1	5	2	3	13	0.005993545
全指示詞の合計	297	346	369	523	285	349	2169	

表4 Y児(2;0)-(2;5)に対する入力における指示詞各形の月齢別出現回数

指示詞/月齢	2;0	2;1	2;2	2;3	2;4	2;5	計	割合
これ	222	126	102	116	127	148	841	0.522036002
こ	29	30	29	34	21	84	227	0.140906269
こっち	28	28	26	10	14	27	133	0.082557418
こちら	7	0	1	0	1	0	9	0.005586592
この	27	24	34	26	35	24	170	0.105524519
こんな	14	6	13	6	9	22	70	0.043451273
こう	26	20	23	29	19	44	161	0.099937927
あれ	9	4	6	4	7	2	32	0.242424242
あそこ	9	1	2	3	3	0	18	0.136363636
あっち	6	11	10	12	13	16	68	0.515151515
あちら	2	0	0	0	0	0	2	0.015151515
あの	2	2	3	3	0	0	10	0.075757576
あんな	0	0	0	0	0	1	1	0.007575758
ああ	0	0	0	1	0	0	1	0.007575758
それ	53	30	39	47	53	35	257	0.46557971
そこ	10	7	24	12	9	16	78	0.141304348
そっち	3	1	1	1	3	2	11	0.019927536
そちら	0	0	0	0	0	0	0	0
その	11	7	13	8	19	10	68	0.123188406
そんな	17	16	22	6	14	8	83	0.150362319
そう	10	6	17	9	4	9	55	0.099637681
コ系指示詞の計	353	234	228	221	226	349	1611	0.701960784
ア系指示詞の計	28	18	21	23	24	18	132	0.05751634
ソ系指示詞の計	104	67	116	83	102	80	552	0.240522876
全指示詞の合計	485	319	365	327	352	447	2295	

Y児における指示詞各形の使用実態を大づかみするために、データ別各系指示詞の出現回数  
の計を表5にまとめる。

表5 データ別各系指示詞の出現回数

Y児 (1;6)-(1;11) における各系指示詞の出現回数 (表1参照) ア系 (511回=53%) > コ系 (450回=46%) ≧ ソ系 (8回=1%未満)
Y児 (2;0)-(2;5) における各系指示詞の出現回数 (表3参照) コ系 (2018回=93%) > ア系 (138回=6%) ≧ ソ系 (13回=1%未満)
Y児 (1;6)-(1;11) に対する入力における各系指示詞の出現回数 (表2参照) コ系 (2007回=67%) > ソ系 (632回=21%) > ア系 (366回=12%)
Y児 (2;0)-(2;5) に対する入力における各系指示詞の出現回数 (表4参照) コ系 (1611回=70%) > ソ系 (552回=24%) > ア系 (132回=6%)

大野 (2005:15) は、結論の第一点目として、下記のように述べている。

「Y児 (1;6)-(1;11) における指示詞各形の使用実態を、大づかみすると、表8における各系指示詞の出現回数の計にあるように、「ア系 (511回=53%) > コ系 (450回=46%) ≧ ソ系 (8回=1%)」である。「まず、およそ1歳半ぐらいにコ系とア系が現れ、ソ系は、約半年から1年くらい遅れて現れる。」という大久保 (1967)、岩淵・他 (1968) の縦断的観察記録研究の報告と一致していると言って良い。Y児 (1;6)-(1;11) におけるソ系指示詞の未発達は明白である。」

表3・表5を見ると、Y児 (2;0)-(2;5) においても、ソ系指示詞がいまだ未発達であることがわかる。(1;6) におけるコ系指示詞の出現回数が50回、ア系指示詞の出現回数が15回である事実と、(2;0)-(2;5) におけるソ系指示詞の出現回数総数が13回である事実を比較すれば、少なくとも、Y児では、ソ系指示詞を「安定的に発話する」ということの遅れが1年を超えることは明らかである。<sup>2</sup>

とは言うものの、Y児 (1;6)-(1;11) においては、(1;9) に2回しか出現しなかった「それ」が、(2;1.19) に1回、(2;3.10) に1回、(2;4.28) に1回、(2;5.6) に2回 (内、1回は模倣的) と出現していることから自発的使用 (=獲得) の萌芽を感じる。「まず、およそ1歳半ぐらいにコ系とア系が現れ、ソ系は、約半年から1年くらい遅れて現れる。」という大久保 (1967)、岩淵・他 (1968) の縦断的観察記録研究の報告と、「現れる」という点で一致していると言って良い。

久慈・斉藤 (1982) は、1歳から2歳半の幼児24人を対象に8ヶ月間、1週間に1度、幼児たちの母親に指示詞を含むダイクシス語の出現を観察してもらい、それらの表現がいつ頃現れるかを研究した。指示詞の出現は、「ここ、これ」が大体1歳半頃、「あっち、こっち」が1歳9

ヶ月である。それに対して、ソ系は2歳4・5ヶ月頃に、「それ、そこ」が出現すると報告している。Y児(1;6)-(1;11)における「そこ」の出現は、(1;9)と(1;11)に各1回の2回のみである。Y児(2;0)-(2;5)における「そこ」の出現は、(2;3.30)における2回のみである。

大野(2005:15)は、結論の第二点目として、下記のように述べている。

「ある文法構造・文法項目について、幼児の使用と大人の使用に相関関係がある場合は多い。相関関係が無い場合には、なんらかの理由があるはずである。日本語指示詞の使用について、Y児(1;6)-(1;11)との比較のために、表9(=Y児に対する入力)における各系指示詞の出現回数の計を見ると、実に興味深い。各系指示詞の出現回数は、「コ系(2007回=67%)>ソ系(632回=21%)>ア系(366回=12%)」であった。これは、Y児(1;6)-(1;11)における「ア系>コ系>ソ系」という事実とまったく異なっている。「日本語指示詞の直示用法が確立している成人にとり、通常の会話は、正保(1981:66-75)のいう(「融合型」ではなく、)「対立型」を成す場合が多いため」、という理由が考えられる。」

表3・表4・表5から、Y児(2;0)-(2;5)においても、類似の状況であることがわかる。すなわち、日本語指示詞の直示用法が確立している成人にとり、通常の会話は、正保(1981:66-75)のいう(「融合型」ではなく、)「対立型」を成す場合が多いため、Y児(2;0)-(2;5)に対する入力における各系指示詞の出現回数は、「コ系>ソ系>ア系」であるが、Y児(2;0)-(2;5)における各系指示詞の出現回数は、「コ系>ア系>ソ系」である。この原因は、ソ系指示詞の未発達と考えられる。

しかし、Y児(2;0)-(2;5)における各系指示詞の出現回数を、Y児(1;6)-(1;11)における各系指示詞の出現回数と比較すれば、発達も見られる。すなわち、(1;6)-(1;11)においては、「ア系(511回)>コ系(450回)」であった部分が、「コ系(2018回)>ア系(139回)」と変化している点である。すなわち、入力(=大人)と同じく、「コ系が最多」という状態になったのである。この点は、発達と考えられる。

また、ア系指示詞については、出現回数計の点から見れば、入力(=大人)と同じ状態になっていると考えて良いだろう。Y児(2;0)-(2;5)における全指示詞の合計は、2169回。Y児(2;0)-(2;5)に対する入力(=大人)における全指示詞の合計は、2295回。ほぼ同数である。また、Y児(2;0)-(2;5)におけるア系指示詞の計は、138回。Y児(2;0)-(2;5)に対する入力(=大人)におけるア系指示詞の計は、132回。ほぼ同数である。双方のデータ(表3vs.表4)において、全指示詞の合計がほぼ同数で、ア系指示詞の計も、ほぼ同数ということである。ア系指示詞については、出現回数計の点から見れば、入力(=大人)と同じ状態になっているのだろう。

Y児(2;0)-(2;5)におけるコ系指示詞の出現回数(2018回)と出現割合(93%)が高いという事実は、ソ系指示詞の未発達(出現回数13回、出現割合0.6%)に起因していると考えて良いのではないだろうか。

Y児 (2;0)-(2;5) におけるア系指示詞の安定化を前述したが、これを裏付ける証拠と思われる現象がある。Y児 (1;6)-(1;11) において、たびたび出現した「あれ」の連続発話という現象が、(2;0.5) (= (2;0) 第1回目の撮影) を最後に、姿を消した点である。(1) と (2) は、(2;0.5) における「あれ」の連続発話を含んでいる。<sup>3</sup>

(1) 「あれ」の連続発話8回=4回+4回 Y (2;0.5)

\*CHI: 0 .  
 %act: たちあがって はしる  
 \*CHI: あんね、あれ あれ あれ あれ でしょ .  
 %gpx: もくば を ゆびさし  
 \*CHI: おうま おうま おうま .  
 %act: もくば に さわる  
 %tim: 19:23  
 \*CHI: あれ あれ あれ あれ .  
 %gpx: もくば を ゆびさし  
 \*MOT: はい .  
 \*MOT: のる の ,, これ に ?  
 %gpx: もくば を もちあげる  
 \*MOT: おうまさん のって いい よ .

(2) 「あれ」の連続発話13回=4回+4回+5回 Y (2;0.5)

\*MOT: もうすぐ Yちゃん おむつ とれちゃう ね ,, これ じゃあ .  
 %gpx:  
 \*MOT: ねー .  
 %act: おむつ を ふくろ に しまう  
 %tim: 19:52  
 \*BRO: はい .  
 \*BRO: これ が ハンバーグ .  
 %gpx: おもちゃ の ハンバーガー を MOT に さしだす  
 \*MOT: ありがとう .  
 \*CHI: だめ .  
 \*CHI: あーちゃん の .  
 %act: さら から ハンバーガー を とる  
 \*MOT: あーちゃん の ?  
 \*BRO: じゃあ これ やめ よ .

%gpx: CHI から おもちゃ を とる  
 \*CHI: ああ あれ ああ あれ あれ あれ ああれ .  
 %gpx:  
 \*CHI: あれ ない あれ ない よー あれ あれ .  
 %gpx:  
 %tim: 19:53  
 \*CHI: あれ あれ あれ あれ あれ .  
 %gpx:  
 \*MOT: なに ?  
 \*MOT: どうしたの ?  
 \*MOT: たべて いい ?  
 \*MOT: おかあさんに ちょうだい ,, じゃあ それ .  
 %gpx: さら を さしだす  
 \*CHI: 0 .  
 %act: ハンバーガー を MOT の さら に のせる  
 \*MOT: ありがとう .

従来の研究、特に、伊藤友彦氏の一連の研究(伊藤(1988)、Ito(1989a, 1989b)、伊藤(1990))と筆者自身の縦断的観察経験から、健常児における二語発話期から多語発話期への移行は、通常、(1;11)-(2;0)と考えている。前述したア系指示詞の安定化は、二語発話期から多語発話期への移行、すなわち、伊藤(1990)の言う「処理機構の変換を伴う「前統語構造期(格助詞未使用期)=単語処理段階(処理単位が単語)」から「統語構造期(格助詞使用期)=文処理段階(処理単位が句)」への移行」と連動する現象なのかもしれない。

同様に、この移行と連動するかもしれない現象として、コ系指示詞の安定化もあげられよう。「発達であると考えられる」と前述したが、Y児(2;0)-(2;5)におけるコ系指示詞の出現回数が、入力(=大人)と同じく、「コ系が最多」という状態になった点である。この現象には、3種のコ系指示詞が寄与している。第一に、「これ」であるが、(1;10)まで2桁の出現回数が、(1;11)と(2;0)で100回超となり、(2;1)以降、ほぼ200回超となっている。第二に、「こっち」であるが、(2;0)まで、ほぼ1桁の出現回数で、多くても(1;10)の13回であったのが、(2;1)以降、ほぼ50回超の出現回数となっている。第三に、「こう」であるが、(2;1)まで、ほぼ1桁の出現回数で、多くても(1;10)の13回であったのが、(2;2)以降、ほぼ40回近い出現回数となっている。

大野(2005:15)は、結論の第三点目として、下記のように述べている。

「Y児(1;6)-(1;11)における指示詞各形の出現回数に目を転じると、出現回数が3桁に達

したものは、「あれ(403回)、これ(318回)、あっち(103回)」である。出現回数が2桁に達したものは、「ここ(77回)、こっち(35回)、こう(16回)」である。「この、こんな、あそこ、あの、あんな、それ、そこ、そっち、その」は、出現しているものの、1-3回である。Y児(1;6)-(1;11)が獲得していると言えるのは、「あれ、これ、あっち、ここ、こっち、こう」の6つであろう。」

表3で、(2;0)-(2;5)における指示詞各形の出現回数を見ると、出現回数が3桁に達したものは、「これ(1477回)、こっち(285回)、こう(136回)」である。出現回数が2桁に達したものは、「あっち(68回)、ここ(65回)、あれ(63回)、この(48回)」である。5-7回出現したものは、「あの(7回)、こんな(6回)、それ(5回)」である。「こちら、そこ、そっち、その、そんな」は、出現しているものの、1-3回である。「あそこ、あちら、あんな、ああ、そちら、そう」は出現しなかった。しかしながら、入力(=大人)においても、「あちら、あんな、ああ、そちら」の出現は0-2回に過ぎない。「これ、こっち、こう、あっち、ここ、あれ、この、あの、こんな、それ」については、Y児(2;0)-(2;5)が獲得していると言えるのではないだろうか。表6も参照のこと。

表6 Y児(1;6)-(1;11)とY児(2;0)-(2;5)における出現回数順の指示詞各形

Y(1;6)-(1;11)	あれ>これ>あっち>ここ>こっち>こう
Y(2;0)-(2;5)	これ>>こっち>こう>>あっち>ここ>あれ>この>>あの>こんな>それ

### 第3章 Y児およびY児に対する入力における興味深い日本語指示詞を含む発話

第1章で概説した、各回約1時間3分の撮影ビデオから、発話、動作などを転記して、発話データファイルを作成した。大野(2005)においては、これら各回の発話データファイルに対して、CHILDESのCLANを利用して、各種の検索を実施した。(MacWhinney(2000)、MacWhinney & Snow(1985)、宮田(2004)、Oshima-Takane & MacWhinney(1995)、Oshima-Takane et al.(1998)、杉浦・他(1997)参照。)まず、freq検索(たとえば、「freq+t\*CHI+s”kore”」)をかけ、指示詞各形の出現回数を調べた。

これに対して、本研究においては、まず、ワードで発話データファイルを作成した。そして、ワードの検索機能を用いて、指示詞各形の出現回数を調べた。その結果、文脈における各指示詞の機能をじっくり考察することができた。そして、Y児の発話においても、Y児に対する入力においても、興味深い日本語指示詞を含む発話を観察することができた。

#### 3.1 Y児(2;0)-(2;5)における興味深い日本語指示詞を含む発話

大野(2005:13-14)で、「Y児(1;6)-(1;11)の発話において、「あれ」が高頻度で出現した理由のひとつには、誤用があげられる。」とし、「これ」の代わりに、「あれ」を誤用

した例として、Y(1;11.6)における2例を報告した。(2;0)-(2;5)においても同様の誤用が出現している。(3), (4)を参照。しかし、(2;0.15)(= (2;0)第2回目の撮影)以降、ア系指示詞の使用が安定したため、この種の誤用は大幅に減少している。

(3) 「これ」の代わりに、「あれ」を誤用 Y(2;0.15)

- \*GMM: あっ # そうするものなの,, これ?  
 %gpx: ゆびさし かつ さわっている  
 \*GMM: へー よくしってるねえ.  
 \*CHI: あれ[: これ].  
 %gpx: ゆびさし かつ さわっている  
 %com: 誤用  
 \*GMM: ん?  
 \*CHI: あか.  
 %gpx: ゆびさし かつ さわっている  
 \*GMM: あかー あかー.  
 \*CHI: xxx.  
 %act: えほんのなかのえをつかもうとする  
 \*GMM: とれない.  
 %act: ページをめくる  
 \*GMM: おっ ロケット だー ロケット だー.  
 \*CHI: xxx.  
 %act: ロケットのひっぱりぶをひっぱる

(4) 「これ」の代わりに、「あれ」を誤用 Y(2;0.15)

- \*GMM: はい # ひとつずつ みましょう.  
 %act: はこからアルバムをひきぬく  
 \*CHI: 0.  
 %act: アルバムをひらく  
 \*GMM: おっ おともだちいるねえ.  
 \*GMM: おおぜいともだちいたねえ, Yちゃん.  
 \*CHI: あれ[: これ]は?  
 %gpx: ゆびさし かつ さわっている  
 %com: 誤用  
 \*GMM: だれ かなあ?  
 \*GMM: おしえて.

\*CHI: これっ [: これ ] .  
%gpx: ゆびさし かつ さわっている

反対に、「あれ」の代わりに、「これ」を誤用した発話も出現している。

(5) 「あれ」の代わりに、「これ」を誤用 Y (2;3.10)

\*CHI: どいて ちょっと .  
%act: おしいれ を あける  
\*FAT: いま はつわ は さつえいちゅう の ちちおや に むかって です .  
\*CHI: ねえ これ [: あれ ] とおて [: とって ] ?  
%gpx: おしいれ に ある ドウローイングセット を ゆびさす  
\*MOT: えー やだ ,, あれ .  
%gpx: おしいれ に ある ドウローイングセット を  
\*CHI: これ [: あれ ] これ [: あれ ] これ [: あれ ] これ [: あれ ]  
これ [: あれ ] ちょうだい .  
%gpx: おしいれ に ある ドウローイングセット を ゆびさす  
%tim: 17:04  
\*CHI: これ [: あれ ] .  
%gpx: おしいれ に ある ドウローイングセット を ゆびさす  
\*CHI: これ [: あれ ] ちょうだい .  
%gpx: おしいれ に ある ドウローイングセット を ゆびさす  
\*CHI: うえ の やつ ちょうだい .  
\*FAT: えー くらい ドウローイングセット を ゆびさしていました .  
\*MOT: Yちゃん , ズボン はいてよ ズボン .  
\*MOT: これ に ふた して .  
%gpx: ペン に ふれている  
\*MOT: ふた そこ だよ .  
%gpx:  
\*CHI: 0 .  
%act: ふた を ひろって MOT に てわたす  
\*MOT: Yちゃん , さむくなっちゃった .  
\*MOT: ふく もってこよう かな .  
\*CHI: これ [: あれ ] ちょうだい .  
%gpx: おしいれ に ある ドウローイングセット を ゆびさす

\*CHI: はっはっ はやあ .  
 %par: よろこん で わらう  
 \*CHI: xxx .  
 %act: ドウローイングセット の ふた を あける  
 \*CHI: これは こっち .  
 %gpx: えのぐ を ドウローイングセット の なか の もと の いち に もどす

(5) には、誤用の「これ」が9回出現している。同じ対象 (=押し入れの中にあるドウローイングセット) を意味して、母親が「あれ」と発話しているので、「あれ」が正用法であることがわかる。自分の縄張り内の対象としたい気持ちが強いために、「これ」を使用してしまったのであろうか。

さらに興味深い発話は、(6) である。正用法の「あれ」を発話した直後に、「これ」と自己修正の発話をしたが、誤用である。

(6) 「あれ」の代わりに、「これ」を誤用 Y (2;1.4)

\*CHI: ケチャップ は ?  
 %act: MOT を みる  
 %tim: 0:16  
 \*MOT: ケチャップ すきなの ?  
 \*CHI: うん .  
 %act: だいどころ へ いどう する  
 \*CHI: たべたい , , ケチャップ .  
 \*CHI: あれ # これ [: あれ ] .  
 %gpx: つくえ の うえ を ゆびさす  
 %gem: interesting アレ で ただしい のに コレ と じこしゅうせい  
 \*CHI: あったよ # あったよ .  
 %act: つくえ を いじっている

(5) と (6) に関連する記述として、Diessel (2006:483 note 4) を引用しておく。<sup>4</sup>  
 「English-speaking children need several years to learn the concept of relative distance and the correct interpretation of the deictic centre (cf. Clark 1978, 2003; Clark and Sengul 1978).」程度の差はあれ、日本語を第一言語とする幼児においても類似の状況が存在しているのかもしれない。

特に、英語を第一言語とする幼児において上記の状況が存在することは、Niimura (2003),

新村 (2006) が主張する「対象を現場に捉える日本語と脱現場化する英語」という事実観察によって、原理的に説明できるものと思われる。

(7) も興味深い。「こ(れ)」と誤用しかけたところで、誤用に気がついたのか正用法の「あれ」で自己修正の発話をした。(2;5) になり、使用が安定してきている証拠と言えようか。

(7) 「こ(れ)」と誤用しかけたところで、正用法の「あれ」で自己修正 Y (2;5.6)

\*CHI: これ .  
 %gpx: べつ の さら の だいこん を たべる  
 \*MOT: それは だいこん .  
 %gpx:  
 %act: すいか を スプーン で すくって CHI に たべさせよう と する  
 \*CHI: Yちゃん Yちゃん こっ [//] あれ の やつ が いー .  
 %gpx: すいか を こばみ べつ の もの を ゆびさす  
 %tim: 19:12  
 \*MOT: かつお ?  
 \*CHI: うん かつお .  
 \*MOT: かつお かー .

(8) において、「あれ」の意図は明確である。「それ (= 祖母に電話すること)」よりも「あれ (= パラソルチョコレート)」なのである。「それ」に対する対比用法と言えようか。

(8) 使用意図が明確な「あれ」。「それ」に対する対比用法。 Y (2;4.4)

\*FAT: えー しょだな の なか に パラソルチョコレート が はいっている の を  
 して いて それ に みぎて を のぼしました .  
 %gpx: パラソルチョコレート を いみ する  
 \*MOT: あ # Yちゃん .  
 \*CHI: 0 .  
 %act: MOT を みる  
 \*MOT: グランマ に でんわ して .  
 \*CHI: ん んー .  
 %act: MOT の とこ ろ へ いく  
 \*CHI: ん あっ .  
 %act: MOT の て を ひっぱる  
 %tim: 7:16

\*CHI: いや .  
 %act: MOT に ちかづく  
 \*MOT: きのうち グランマ Yちゃん に はなしたがってた よ .  
 \*CHI: ん .  
 \*MOT: でんわ する ?  
 \*CHI: ん ちがう .  
 \*CHI: あれ が いい .  
 %gpx: パラソルチョコレート を ゆびさしている  
 \*CHI: かしゃ [: かさ ] が いい  
 %act: だだ を こねる

(9) においても、「あれ」の使用意図は明確である。「これ (= 手で触れたひとつのブロック)」に対する「あれ (= 別のブロック)」なのである。「これ」との対比用法で、「あれ」と「これ」の双方が明示的に出現している。興味深い発話である。

(9) 使用意図が明確な「あれ」。「これ」に対する対比用法。 Y (2;5.23)

\*MOT: Yちゃん .  
 %tim: 9:43  
 \*CHI: どこ に どこ ?  
 \*CHI: だれ が Y よ ?  
 \*CHI: xxx .  
 \*CHI: xxx .  
 \*CHI: xxx .  
 \*CHI: 0 .  
 %act: ブロックを さわる  
 \*CHI: くっつけて よ .  
 \*CHI: あれ が ない から これ .  
 %gpx: ブロックを さわる  
 %gem: contrastive use

観察期間中、Y (2;0.15) にのみ、文脈指示と考えられる「あれ」が10回出現した。(10)における「あれ」は、祖母の発話における「あか」の照応形である。二人の間には、「赤のウノ」を指示しているという共通理解が成立している。

## (10) 文脈指示の「あれ」 Y (2;0.15)

\*CHI: みどり！  
 \*GMM: みどり ちょうだーい。  
 \*CHI: 0。  
 %act: GMM に みどりいろ の ウノ を わたす  
 \*GMM: そう そう そう そう。  
 %tim: 14:35  
 \*GMM: あか ちょうだーい。  
 \*CHI: あっ あっ。  
 %act: さがす  
 \*GMM: あか みつけて ちょうだーい。  
 \*GMM: あか あった かなあ？  
 \*CHI: あらっ。  
 \*GMM: あれっ # あか あった かなあ？  
 %com: interjection  
 \*CHI: 0。  
 %act: みどりの ウノ を とる  
 \*GMM: みどり ちょうだーい。  
 \*CHI: これ これ。  
 %gpx: GMM に みどりいろ の ウノ を わたす  
 \*GMM: はい # みどり ねー。  
 \*GMM: はい # あか ちょうだーい。  
 \*CHI: あれっ [: あれ ] あれっ [: あれ ] あれっ [: あれ ]。  
 %com: contextual reference  
 %com: episodic memory  
 %act: あか の ウノ を さがしている

## 3.2 Y児 (2;0)-(2;5) に対する入力における興味深い日本語指示詞を含む発話

Y児 (2;0)-(2;5) に対する入力における日本語指示詞の最大の特徴は、文脈指示のア系指示詞が少なからず出現したことである。したがって、これら文脈指示のア系指示詞は、表4に含めていない。Y児 (2;0)-(2;5) に対する入力における文脈指示のア系指示詞は、「あれ (14回)、あそこ (2回)、あの (11回)、あんな (1回)」の合計28回であった。<sup>5</sup>

(11) 文脈指示の「あの」 MOT when Y (2;3.6)

- \*CHI: さかな は ?
- \*MOT: <おーとなー のー はりー とー> [=! singing] . [+ bch]
- \*MOT: さかな なかったね ,, きょう .
- \*MOT: あっ あの サーモン なら ある よ .
- %com: contextual reference
- %com: episodic memory
- \*MOT: たべる ?
- \*CHI: サーモン .
- %act: キウイ を たべている
- \*MOT: しまっちゃったもん ,, サーモン ,, れいぞうこに .
- \*CHI: サーモン [/] サーモン は ?
- \*MOT: たべる の ?
- %act: CHI に キウイ を たべさせている
- \*CHI: 0 .
- %act: キウイ を スプーン で とる
- \*MOT: <ふーふふーふー> [=! singing] . [+ bch]
- \*CHI: できた よ .
- \*CHI: できた .
- %act: すくった キウイ を MOT に みせる
- \*MOT: できた ?
- \*CHI: 0 .
- %act: キウイ を たべている
- %tim: 7:30

(12) 文脈指示の「あれ」 MOT when Y (2;3.10)

- \*CHI: すごく あつい ?
- %act: いも を さわろう と する
- %tim: 17:27
- \*MOT: すごく あつい よ .
- %par: わらう
- \*MOT: すごく あつい よ ほら .
- \*CHI: みせて .
- \*MOT: さわってみれば いい じゃん ほら .
- %act: いも を さわる

%par: わらう  
 \*MOT: は一 おにいちゃん あした これ もってきや いいな .  
 %gpx: いも を  
 \*CHI: あっ これ かわ むいて たべる .  
 %gpx: いも を さわる  
 \*MOT: あした おにいちゃん あれ@gem だった .  
 %com: contextual reference  
 %com: cataphoric reference  
 %com: episodic memory  
 \*MOT: えんそく だった .  
 \*CHI: かわ えんそく の おやこ の いくんだ よ .  
 \*MOT: は # おやこえんそく ?  
 %act: いも を て で さわる  
 \*MOT: あった ?  
 \*CHI: おやこえんそく の いくんだ よ .

Y児 (2;0)-(2;5) に対する入力に出現した文脈指示の「あれ」は、上の発話におけるような後方照応が半数 (= 7/14) であった。そして、上の発話における「あれ」は、脳内の発話処理において、脳内に「遠足」という概念、イメージが浮かんではいないものの、「遠足」という語彙項目を決定することに手間取った際に、時間つなぎの代用形として発話されているものと考えられる。さらに、上の会話では、現場には実在しない「遠足」という明日の兄の予定であるにも関わらず、二人の間には、「兄が明日行く予定の遠足」という共通理解が成立している。<sup>6</sup>

話し手と話し相手の共有知識や共有体験に基づいた原理的説明は、金水・田窪 (1990) に代表される「談話管理理論」が得意とするところである。

Y (2;4.14) において、兄は (6;10.20) であったが、下記を発話している。

(13) 文脈指示の「あれ」 BRO (6;10.20) when Y (2;4.14)  
 \*CHI: ねろ—— .  
 %act: おかしな かお を する  
 %tim: 19:22  
 \*MOT: ねえ なんで ひまわり の たね が こんな ところ に おちてんの ?  
 \*CHI: ひまわり の たね .  
 %act: おきあがる

- \*CHI: なあに？  
 \*CHI: なあに？  
 %act: MOT の ところ に あるいて いく  
 \*FAT: クレヨンしんちゃんの えいが を みに いて もらってきたんです。  
 \*MOT: ちがう よ。  
 \*MOT: この たね じゃない よね。  
 %gpx: ひまわり の たね を  
 \*MOT: これ じゃない よ。  
 %gpx: ひまわり の たね を  
 \*CHI: んー。  
 %act: MOT の ふく を ひっぱる  
 \*CHI: みせて。  
 %act: MOT の て から たね を とる  
 \*BRO: だって あれ の さあ ふくろ あけて なかった よ。  
 %com: クレヨンしんちゃんの えいが を みに いて もらった ふくろ  
 %com: contextual reference  
 %com: episodic memory  
 \*MOT: ない よね。  
 \*FAT: あっ そう。

金水(1999:67)は「本稿では、ア系列の非直示用法は「記憶指示」、すなわち話し手の出来事記憶内の要素を指し示すものであり、コ系列の非直示用法は「談話主題指示」、すなわち先行文脈の内容を中心的に代表する要素または概念を指し示すものと考え」と主張する。(10)-(13)におけるア系指示詞の非直示用法は、金水(1999)の「記憶指示」原理により説明できる。逆の言い方をすれば、(10)-(13)におけるア系指示詞の非直示用法は、金水(1999)の「記憶指示」原理の証拠となる。金水(2000)も参照のこと。

#### 第4章 結論

まず、第一に、表3・表5を見ると、Y児(2;0)-(2;5)においても、ソ系指示詞がいまだ未発達であることがわかる。(1;6)におけるコ系指示詞の出現回数が50回、ア系指示詞の出現回数が15回である事実と、(2;0)-(2;5)におけるソ系指示詞の出現回数総数が13回である事実を比較すれば、少なくとも、Y児では、ソ系指示詞を「安定的に発話する」ということの遅れが1年を超えることは明らかである。とは言うものの、Y児(1;6)-(1;11)においては、(1;9)に2回しか出現しなかった「それ」が、(2;1.19)に1回、(2;3.10)に1回、(2;4.28)に1回、

(2;5.6) に2回(内、1回は模倣的)と出現していることから自発的使用(=獲得)の萌芽を感じる。「まず、およそ1歳半ぐらいにコ系とア系が現れ、ソ系は、約半年から1年くらい遅れて現れる。」という大久保(1967)、岩淵・他(1968)の縦断的観察記録研究の報告と、「現れる」という点で一致していると言って良い。

第二に、日本語指示詞の直示用法が確立している成人にとり、通常の会話は、正保(1981:66-75)のいう(「融合型」ではなく、「対立型」を成す場合が多いため、Y児(2;0)-(2;5)に対する入力における各系指示詞の出現回数は、「コ系>ソ系>ア系」であるが、Y児(2;0)-(2;5)における各系指示詞の出現回数は、「コ系>ア系>ソ系」である。この原因は、ソ系指示詞の未発達と考えられる。

しかし、Y児(2;0)-(2;5)における各系指示詞の出現回数をY児(1;6)-(1;11)における各系指示詞の出現回数と比較すれば、発達も見られる。すなわち、(1;6)-(1;11)においては、「ア系(511回)>コ系(450回)」であった部分が、「コ系(2018回)>ア系(139回)」と変化している点である。すなわち、入力(=大人)と同じく、「コ系が最多」という状態になったのである。この点は、発達と考えられる。また、ア系指示詞については、出現回数計の点から見れば、入力(=大人)と同じ状態になっていると考えて良いだろう。

第三に、表3で、(2;0)-(2;5)における指示詞各形の出現回数を見ると、「これ、こっち、こう、あっち、ここ、あれ、この、あの、こんな、それ」については、Y児(2;0)-(2;5)が獲得していると言えるのではないだろうか。

#### 謝辞・注

\* 発話資料収集にあたり御協力頂いたY児、MOT、FAT、BRO、GMMの各氏、および発話資料データベース作成にあたり、部分的に御協力頂いた愛知淑徳大学文化創造学部多元文化専攻大野ゼミOG関係各位に謝意を表します。本研究は、2005年度愛知淑徳大学研究助成(個人)の成果の一部である。ここに記して愛知淑徳大学に感謝申し上げます。

1 大野(2005)は、日本語指示詞の第一言語獲得に関する従来の研究を概観し、第一言語獲得に関する文献を中心に参照文献をまとめた。大野(2005)出版後、これまでに得た主な文献は、Hoji et al.(2000, 2003)、伊藤・田中・細川(2004)、Niimura(2003)、新村(2004, 2006)、迫田(2004, 2007)、単(2005)、白井・Patschke(2000)、菅沼(2000)、渡辺(2003, 2007)などである。日本語指示詞に関する最新文献情報は、下記URLで得られる。金水・田窪(1992)も参照のこと。2007年2月14日に指示詞研究会も設立された金水敏先生、田窪行則先生の御尽力に深謝します。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kinsui/sizisi/dembib.html>

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kinsui/sizisi/contents.html>

お茶の水女子大学日本語文化学会研究会の編集による下記URLも役立つ。森塚(2003)、単(2005)も参照

のこと。

<http://jsl2.li.ocha.ac.jp/saizensen/index.html>

大野・他・編 (2001) による下記URL も有用である。

<http://cow.lang.nagoya-u.ac.jp/jbib/>

2 付言しておくが、Y児は健常児である。MLU を算出していないが、3名の健常児を縦断的に観察した者として、言語発達速度の個人差について筆者の印象を述べれば、理解面でも産出面でも、Y児の言語発達は平均より早かった。

3 発話資料中で使用した記号の内、主要なものは、以下の通りである。コーディングの詳細については、Oshima-Takane et al. (1998) を参照。

(2;0.5) 発話時の観察対象児の年齢。(年;月,日)を表す。

\*CHI: 観察対象児の発話のはじまり

\*MOT: 母親の発話のはじまり

\*FAT: 父親の発話のはじまり

\*BRO: 兄の発話のはじまり

\*GMM: 母方の祖母の発話のはじまり

%sit: 状況を記述する付属ライン

%act: 行動を記述する付属ライン

%gpx: 指さしなど身ぶりを記述する付属ライン

%com: コメントを記述する付属ライン

%tim: 1分ごとの時刻を記述する付属ライン

%gem: 興味深い発話を指摘する付属ライン

A@gem A が興味深い出現形であることを発話行において指摘する

A[:B] 発音形[:正用法]

xxx 聴取不能、テープ起こししても不明の部分

4 種々の言語における指示詞に関するDiessel の一連の研究(Diessel (1997a, 1997b, 1998, 1999a, 1999b, 2003, 2005a, 2005b, 2006) は、いずれも興味深い。Dixon (2003)、Fillmore (1982, 1997) も参照。Diessel (2006) が、種々の言語における指示詞の第一言語獲得に関する研究である。下記、Diessel のHPを参照のこと。

<http://www.personal.uni-jena.de/~x4diho/index.html>

5 出現形「あれ、あの、ああ、そう」では、少なからず間投詞が出現している。当然ながら、間投詞と判断したものは、表1・表2・表3・表4に含めていない。

6 Diessel (2006:483 note 8) は、以下のように述べている。「In addition to these uses, there are other more specialized uses in which demonstratives do not have an immediate referent in the surrounding discourse (or speech situation). For instance, many languages employ demonstratives to indicate that speaker and addressee are familiar with an entity or situation due to shared experience (cf. ... and then he did that little raised eyebrow thing ...) (cf. Diessel 1999a: Ch. 5; Himmelmann 1996).」

Diessel (2006:483 note 12) は、後方照応指示詞に関連して、以下のように述べている。「Very often, the source construction included a copy of the cataphoric demonstrative at the beginning of the second clause. While such “correlative constructions” are somewhat different from the example discussed in this section, the grammaticalization process is similar (cf. Diessel 1999a; Hopper and Traugott 1993).」

参考文献

- Clark, Eve V. 1978. From gesture to word: On the natural history of deixis in language acquisition. *Human growth and development*, ed. by J. S. Bruner and A. Garton, 85-120. Oxford: Oxford University Press.
- Clark, Eve V. 2003. *First language acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, Eve V. and C. J. Sengul. 1978. Strategies in the acquisition of deixis. *Journal of Child Language*, 5, 457-475.
- Diessel, Holger. 1997a. Predicative demonstratives. *Berkeley Linguistic Society*, 23, 72-82.
- Diessel, Holger. 1997b. The diachronic reanalysis of demonstratives in crosslinguistic perspective. *Chicago Linguistic Society*, 33, 83-98.
- Diessel, Holger. 1998. *Demonstratives in crosslinguistic and diachronic perspective*. Ph.D. dissertation, State University of New York at Buffalo.
- Diessel, Holger. 1999a. *Demonstratives: Form, function, and grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins.
- Diessel, Holger. 1999b. The morphosyntax of demonstratives in synchrony and diachrony. *Linguistic Typology*, 3, 1-49.
- Diessel, Holger. 2003. The relationship between demonstratives and interrogatives. *Studies in Language*, 27, 581-602.
- Diessel, Holger. 2005a. Distance contrasts in demonstratives. *The world atlas of language structures*, ed. by Martin Haspelmath et al., 170-173. Oxford: Oxford University Press.
- Diessel, Holger. 2005b. Pronominal and adnominal demonstratives. *The world atlas of language structures*, ed. by Martin Haspelmath et al., 174-177. Oxford: Oxford University Press.
- Diessel, Holger. 2006. Demonstratives, joint attention, and the emergence of grammar. *Cognitive Linguistics*, 17, 463-489.  
<http://www.personal.uni-jena.de/~x4diho/Publications.html>
- Dixon, R. M.W. 2003. Demonstratives: A cross-linguistic typology. *Studies in Language*, 27, 61-122.
- Fillmore, Charles J. 1982. Towards a descriptive framework for spatial deixis. *Speech, place, and action*, ed. by Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein, 31-59. Chichester: John Wiley.

- Fillmore, Charles J. 1997. *Lectures on deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Himmelman, Nikolaus. 1996. *Demonstratives in narrative discourse: A taxonomy of universal uses*.  
*Studies in Anaphora*, ed. by Barbara Fox, 205-254. Amsterdam: John Benjamins.
- Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo and Ayumi Ueyama. 2000.  
 Demonstratives, bound variables, and reconstruction effects. *Proceedings of the Nanzan GLOW:  
 The second GLOW meeting in Asia, September 19--22, 1999, Nanzan University, Nagoya*, 141-158.
- Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo, and Ayumi Ueyama. 2003. *The demonstratives in modern Japanese*.  
*Functional Structure(s), Form and Interpretation: Perspectives from East Language*,  
 ed. by Yen-hui Audrey Li and Andrew Simpson, 97-128. New York: Routledge Curzon.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*.  
 Cambridge: Cambridge University Press.
- 伊藤恵子・田中真理・細川徹 2004. 「指示詞コ・ソ・アの理解に関する発達的变化」  
 『東北大学大学院教育学研究科研究年報』, 52, 223-236.
- 伊藤友彦 1988. 「発話の発達と統語構造の出現」  
 『静岡大学教育学部研究報告: 人文社会科学編』, 39, 135-140.
- Ito, Tomohiko. 1989a. *Sentence production: From before to after the period of syntactic structure*.  
*Mita Working Papers in Psycholinguistics*, 1, 51-55
- Ito, Tomohiko. 1989b. *Self-repairs in speech: From before to after the period of syntactic structure*.  
*Tokyo Linguistic From*, 2, 75-80.
- 伊藤友彦 1990. 「発話の非流暢性を手がかりとした発話の発達研究:  
 発話における文処理機能発達モデル」 『日本語学』, 9:10, 101-110.
- 岩淵悦太郎・他 1968. 『ことばの誕生: うぶ声から五才まで』 東京: 日本放送出版協会
- 金水 敏 1999. 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」  
 『自然言語処理』, 6:4, 67-91.
- 金水 敏 2000. 「指示詞: 「直示」再考」 『別冊国文学 現代日本語必携』, 160-163.
- 金水 敏・田窪行則 1990. 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」  
 『認知科学の発展』, 3, 85-115. 東京: 講談社
- 金水 敏・田窪行則 1992. 『日本語研究資料集1指示詞』 東京: ひつじ書房  
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kinsui/sizisi/contents.html>
- 久慈洋子・斎藤こずゑ 1982. 「子どもは世界をいかに構造化するか: deictic wordsの獲得」  
 秋山高二・他・編『言語の社会性と習得』, 221-243. 広島: 文化評論出版社
- MacWhinney, Brian. 2000. *The CHILDES project: Tools for analyzing talk*,  
 3rd edition. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- MacWhinney, Brian, and Catherine E. Snow. 1985. *The child language data exchange system*.  
*Journal of Child Language*, 12, 271-296.

宮田Susanne・編 2004. 『今日から使える発話データベースCHILDES入門』 東京：ひつじ書房

森塚千絵 2003. 「日本語の指示詞コンアとその習得研究の概観」

日本言語文化学会増刊特集号編集委員会・編 『第二言語習得・教育の研究最前線：2003年版  
(言語文化と日本語教育2003年11月増刊特集号)』, 51-76. 東京：凡人社

<http://jsl2.li.ocha.ac.jp/genbun/saizensen2003/index.html>

Niimura, Tomomi. 2003. Contrastive analysis of Japanese and English demonstratives:

Differences in speaker stance. Ph.D. dissertation, University of London.

新村朋美 2004. 「日英対照にみる「話し手」と「相手」の関係」

『待遇コミュニケーション研究(早稲田大学)』, 2, 33-48.

新村朋美 2006. 「日本語と英語の空間認識の違い」 『言語』, 35:5, 35-43.

大久保愛 1967. 『幼児言語の発達』 東京：東京堂出版

Ono, Seiko. (大野清幸) 1991. A note on the acquisition of the deictic use of KO/SO/A.

Paper presented at TELC meeting. 32p.

大野清幸 2000. 「一女児における日本語指示詞の発達と付帯動作」

『日本発達心理学会第11回大会発表論文集』, 7.

大野清幸 2005. 「日本語指示詞の直示用法の獲得(1)：一女児1歳6ヶ月から1歳11ヶ月までの

予備的研究」 『愛知淑徳大学論集：文化創造学部篇』, 5, 1-19.

大野清幸・大伴 潔・小林春美・白井英俊・白井純子・杉浦正利・平川眞紀子・平川八尋・湯川笑子・

若林茂則・編 2001. JBIB Search.

<http://cow.lang.nagoya-u.ac.jp/jbib/>

Oshima-Takane, Yuriko, and Brian MacWhinney (Eds). 1995.

CHILDES manual for Japanese. Montreal: McGill University.

Oshima-Takane, Yuriko, Brian MacWhinney, Hidetoshi Sirai, Susanne Miyata, and Norio Naka (Eds). 1998.

CHILDES manual for Japanese, Second Edition. Nagoya: The JCHAT Project, Chukyo University.

迫田久美子 2004. 「指示詞コンアの正用と誤用」 『言語』, 33:11, 130-131.

迫田久美子 2007. 「日本語学習者によるコンアの習得」 『言語』, 36:2, 66-73.

単娜(SHAN Na) 2005. 「日本語の指示詞に関する研究概観：対照研究を中心に」

日本言語文化学会増刊特集号編集委員会・編 『第二言語習得・教育の研究最前線：2005年版  
(言語文化と日本語教育2005年11月増刊特集号)』, 69-100. 東京：凡人社

<http://jsl2.li.ocha.ac.jp/genbun/saizensen2005/index.html>

白井純子・Cynthia Patschke. 2000. 「幼児の指示詞の発達：二言語併用児の言語習得からの検討」

『日本認知科学会大会発表論文集』, 17, 144-145.

正保 勇 1981. 「『コンア』の体系」 『日本語の指示詞：日本語教育指導参考書8』, 51-122.

東京：国立国語研究所

菅沼文子 2000. 「最近の指示語研究と日本語からの貢献：指示語使用における普遍性と個性を求めて」

『日本女子大学紀要 文学部』, 49, 1-17.

杉浦正利・中則夫・宮田 Susanne・大嶋百合子 1997.

「日本語習得研究のための情報システムCHILDESの日本語化」 『言語』, 26:3, 80-87.

渡辺伸治 2003. 「ダイクシスと指示コソア」

『言語文化研究(大阪大学言語文化部・言語文化研究科)』, 29, 417-434.

渡辺伸治 2007. 「ダイクシスを捉える枠組み」 『言語』, 36:2, 32-39.